

の日の朝「出席出来ない」旨を樋口氏に告げに來られ、それから二日経つた四日に急逝せられたのであつた。本誌に連載の「近代淨曲巨匠私見」が氏の絶筆となつた譯であるが、これが未完に終つたことは、悔んで返らぬ痛恨事である。

森下氏に次いで辻部氏と、淨瑠璃界にかけがへのない

父と「淨瑠璃雜誌」

辻 部 政 太 郎

父のこのたびのあまりに突然の急逝で、まだ夢のやうな氣持であるが、「淨瑠璃雜誌」同人の方々よりそれぞれ篤い御弔詞を戴き又追悼の記事も書いて下さるといふので、答禮の意味で匆忙の間に短い走り書を寄せさせていたゞく。

父は何事につけても黙々と一つのことに粘り強く一貫した道を進つて來たが、第一義として全精神を打込んだ淨土眞宗の信仰の道の外に、趣味としては、他にもいろいろあつたが、一番、義大夫に傾倒してゐたと思ふ。

本當に惜しい聴き手を失つて、それはひとり本誌の損失のみではなく、藝道のための大損失である。茲に復指導者を失つて、愚痴の身を鞭ちつゝきりひらき進まねばならぬ幾山河を思ひ、私は暗澹として途方を失ふばかりである。

父方の祖父が好きであつた感化もあつて、十一、二歳の頃、はじめて文樂の門をくゞつて以來、その愛好は終始變らなかつた。

祖父は、自分でもいくらか語つたらしいが、父は自分では一口も語らずに、ただ聴き味ふことのみで一貫したしかし聴くことにかけては、相當根強く熱心であつたやうで、又よく昔のことを覚えてゐるのには私たちも、時々驚くことがあつた。何年の何月、どの興行の時、出し物が何で、誰が何の段を語つた時、どういふ語り口で

どうよかつたなどと、座談の中に（叔父二人も好きなの
で叔父相手によく語つてゐたことがあるが）よく話が出
てゐたものである。

こんなに急に逝くなるならば、いろいろ聽いて筆録も
しておきたいことが多かつたと悔まれる。

「淨瑠璃雜誌」については、同人故森下辰之助氏が、樋
口氏に應援され、若い世代の識見高い人々を多く推薦さ
れて以來、森下氏とは舊くからの親友であつた父も、同
人に加つて、森下氏があんなに急に逝かれて以來、特に
及ばずながら力を入れてゐた様子であり、又最近誌面も
ぐんぐんよくなつて來たので、非常にそれを樂みにして
ゐたのであつた。

手紙などまことに筆まめであつたが、原稿など習慣的
にあまり書き慣れてゐなかつたので、はじめて最近、こ
の方面では、處女稿にも近い「近代淨瑠璃巨匠私見」を
書いたのを、私自身も嬉しく思ひ、その反響が多少よけ
れば自信を得て、今後いろいろ書くであらうと期待して
ゐたのに、それさへ完了せず、二回きりで、突如腦溢血
で去つてしまつたのは、血肉の至情としても、まことに
残り惜しい。

悔みに來ていただいたの方々も云つて下さるやうに
父は謙讓圓滿な性格で、私たち兄弟も幼い頃から父に強

く叱責された記憶を殆んど一度も持つてゐないくらゐで
あつたが、趣味の上の好惡はかなりハッキリしてゐて、
特に義大夫に關してはさうであつた。

現在の人では古軼大夫を最も彫琢洗鍊された巨匠と觀
て、その精進を尊敬し大成を望みとしてゐる「近代淨曲巨
匠私見」の結論にもそれを書かうとしてゐたと思はれる
それだけにそれを書き終へず、又來年一月の古軼の櫓
下披露興行もきかずに突然逝つたことなども、私たちが
今残念に思ふことの一つである。

ともあれ、父も最後のギリギリまで關心をもち、その
成長發展を樂みにしてゐた「淨瑠璃雜誌」が、幸ひすぐ
れた若い編輯スタッフと高名な先覺者たる同人の方々に
恵まれてゐるので、今後一層發展されんことを、只管期
待し、祈つてやまない次第である。（十六・十一・二十一）

辻部圓三郎氏略歴

一、明治十三年一月廿六日 森久吉の長男として大阪府中河内
郡唐津村新庄四十番屋敷に生る。

一、明治廿七年三月 大阪府中河内郡中河高等小學校卒業、同
窓の親友木村敦壽氏の令兄の推挽により、年若く就職、爾後
學校に進まざりしも、漢籍、詩文、國史等に興味をもち獨學
にて研鑽す。

一、明治廿八年十月 日本生命保險株式會社入社。